⑤ “American Perspectives on China's Communist Party: Atrophy and Adaptation”

講　師：David Shambaugh　氏（Professor of Political Science and International Affairs, Director, China Policy Program, The George Washington University）

日　時：2009 年 3 月 17 日(火)　13:30-15:30

場　所：慶應義塾大学三田キャンパス　東館４階　Ｇ－ＳＥＣセミナー室

言　語：英語

報告要旨：第 5 回研究会は、08 年 4 月に“China’s Communist Party: Atrophy and Adaptation”を出版したシャンボー教授を招き、中国共産党の課題と変化の受容について議論した。

シャンボー氏はまず、共産党研究の動向を踏まえて中国の現状・変容分析を、①政治的崩壊に向かう、②変わらない、③民主化に向かう、の３類型に分類した。特に Andrew Walder の主張する香港モデル（香港ケースを参考にしながら民主化の方向に向かう）の分析を評価し、中国は他国（旧共産主義国家など）の経験から学びながら発展するハイブリッド（混成）国家であるとした。

次にシャンボー氏は、中国が海外から学んだ「変化」について以下の１０の要素を指摘した。①経済的安定性の確保（ゴルバチョフの失敗から）、②経済と社会の国際社会とのリンク、③イデオロギーの合理化、④統治する政党の重要性（革命政党ではない）、⑤党内民主、⑥一般民衆のレベル、⑦情報コントロール、⑧平和的な革命と NGO の役割（カラー革命の経験）、⑨安全保障機関の統制、⑩少数民族問題への注意、である。シャンボー氏は、共産党がこれらの「衰徴（Atrophy）」へ「適応（Adaptation）」していることを重視しながらも、「これで中国共産党は生き延びられるか」と疑問を提示した。

質疑応答では参加者から、共産党と自民党（日本）の比較、強制的な政治コントロールがより中心的なのではないか、共産党の適応能力への評価が高すぎるのではないか、ラテンアメリカ化が社会の混乱を招くのではないか、等の質問が出た。講師は、「衰徴」と「適応」が連鎖的に起こっている、改革は革命に転化する可能性があるが「適応」は革命に直結しない、等返答した。参加者も多く、活発に学術的議論が交わされた実りある研究会であった。